

カンボジア・地雷原の村から義援金とお守り

毎日新聞社のウェブ「毎日jp」に、みなさんに紹介したい記事がありましたので転載します。

＜東日本大震災＞カンボジア・地雷原の村から義援金とお守り

毎日新聞 4月16日(土)15時0分配信

カンボジアの地雷原の村から義援金が届いた。内戦による多くの地雷が残るカンボジアで、綿の栽培や加工によって細々と暮らす人々から、東日本大震災の被災地への義援金とお守りが届いた。彼らの綿製品作りを支援する日本のNPO法人は「額は少ないかもしれないが、貧しい彼らにとっては大変なお金。苦しい中、日本のことを思ってくれる気持ちに感激した。彼らの思いを被災地に届けたい」と話す。

義援金を寄せたのは、カンボジアの北西に位置する地雷原の村やプノンペン近郊で、綿を有機栽培し、ストールなどに加工している人々。多くは、地雷被害で足などを失い、経済的に困窮していた。日本のNPO法人「地雷原を綿畑に！」が09年ごろから彼らを支援、綿製品作りを通じ、徐々に収入が得られるようになっていた。

義援金は、綿製品作りにかかわる約30人の工賃や染め賃1カ月分など計8万円。カンボジアの貧しい地域の1家族の年収約7万円を超える額だ。プノンペン近郊に住む女性たちは、近くの寺院に通って被災地の人々への祈りをささげているという。地雷原の村に住む人からは「今回の地震と津波で、日本の多くの方が亡くなり、被災されたことに、地雷被害者メンバーはショックと悲しみに包まれています。どうか私たちに、皆様の苦しみを分かち合ってください」とのメッセージも届いた。

NPO法人の石井麻木代表は「日本からの支援を受けていた人々が、逆に支援を申し出てくれた。彼らが深く考えた末の思いやりと考え、義援金を受け取ることにした。彼らのことを誇りに思う」と話す。【永山悦子】



この記事を読んで、私は大変ショックを受けました。被災国の当事者である私たちが、これだけの気持ちを持っているのでしょうか。貧困にあえぐ国の人々が、これだけの行動を取る中、私たちは何が出来ているのでしょうか。

ボランティアとか、善意ではなく、日本人の責務として、為すべきことを為さねばなりません。復興のための資金など、お金のことはいくらか協力できると思います。

しかし、私たちにしかできないこともあります。それはやはり学校における教育です。子供たちを育てることです。でも、難しいことです。私たちが、このことをどれだけ理解しているのか。

大変だとか、かわいそうだとか、何とかしなければとか、そういった言葉で語るのは簡単です。そうではない本当の言葉で語り、日本人として“共に助け合う心”を育てていくことが大切だろうと思います。先日の朝会で紹介した「慮る」心と行動力・実践力を育てていきたいと思っています。